NPO법인
삼천리철도

NEWS LETTER

三千里

Vol. 13
2009年1月号

発行
NPO法人 三千里鐵道
〒441-0109
愛知県豊橋市下五井町青木31
TEL.0532-53-6999
FAX.0532-54-4931

新年の辞

先日、次のような一文に出会った。

野蛮なグローバリズムの進行は、必然的に同じような粗暴なナショナリズムを呼び起こす。両者は対極のように見えて双子である。

世界秩序は強者の論理でかろうじて保っている振りをしながら、腐敗と崩壊はとめどなく進んでいる。われわれは大国の響かぬ主張のむなしさと弱さと、またその暴力の残忍さに、強者の野蛮を、心のどこかで逃避しながら承認してはいないだろうか。

今、価値とされていたものが、これからも価値として存在し続けるだろうか。

前記の一文は、私を戦慄させる。戦慄の源は、この社会における70年近い時間の経験と、マイノリティーとしての本能でもある。

100年に一度と言う、この巨大国による人的災害と矛盾は、もっとも弱いところから襲いかかる。

これは経済だけのことでは決してない。

生命や理念、在日としての誇りにまで及ぶだろう。

在日は解放後の60年、彷徨い続けこれからも彷徨いつづけると主張する人は多いが、果たしてそうだろうか。

珠玉のような在日は多い。民族としての矜持をもち、境界線を堂々とまたぎながら、日本のマジョリティーすらも変化させようとしている。

この100年に一度は、世界にとっても、朝鮮半島にとっても、われわれにとっても、試練ではあるが絶好の機会としても捉えなければならない。

北域緑化は、朝鮮半島と東アジアにおける平和の回復、定着運動でもある。繋がったばかりの南北鉄道を、緑の三千里を経てユーラシアへと駆け抜ける、その日を迎える壮大な試みでもある。初年度の戸惑いを、新年の勇気に変えて求めてゆこう。

2009年が、そんな1年であることを。

北域緑化支援への突破口を開こう

三千里鉄道は昨年度の総会で、これまで非武装地帯鉄道連結をめざしてきた方針を北域緑化支援へとシフトさせた。これは一昨年の5月17日、南北列車の試運転が実現し、その年の暮れには開城工団への貨物列車の定期運行が実現したことで、当初の目標を一応達成したからだ。しかし、我々の究極の目標は、南北鉄道連結、正常運行であり、その彼方に朝鮮半島を通過し大陸へと広がる夢の実現である。

そのためには、朝鮮半島での平和定着が不可欠であり、南北の持続的な融和と相互信頼が構築されることが何よりも大切と考える。

北域緑化支援は、北の深刻化する環境問題や生態系保存の観点からも急を要する課題ではあるが、朝鮮半島での平和定着への象徴的な作業でもあるのだ。我々は北域緑化支援を通じて、朝鮮半島の平和と統一を目指し、東アジアの平和と繁栄に寄与したいと考える。

総会の決定に基づき三千里鉄道では昨年、緑化支援の具体的協議のために都相太理事長のピョンヤン訪問を試みたが、折からの南北関係の急速な冷え込みで実現しなかった。しかし今年も我々は、南北両方に働きかけ、具体的な北域緑化支援への突破口を開くために努力する。

昨年4月に結成された韓国の「同胞の森」をはじめ、いま世界各地で北域緑化支援の輪が広がろうとしている。世界的な大変革を予感させる新年、必ずや道は開かれるであろうことを信じたい。（編集部）

朝鮮半島に緑と平和の大地を！北域緑化支援の声、世界に広がる

昨年5月、韓国の民和協をはじめとする20余の団体を網羅した「同胞の森」という、北域緑化支援組織を立ち上げた。さらに、日本の三千里鉄道、北米、ヨーロッパなどの海外同胞、カナダからは世界市民の立場から支援行動をはじめた。その動きを追ってみる。

「韓半島青い森国民運動宣布式」で挨拶する丁世鉉共同代表（昨年5月6日）

「DMZを民族平和地帯にし、その資源を南北が共同して開発・利用し、グローバル時代の世界的観光地、名所にしよう」と、ソウルで記者会見した江原道知事（昨年7月29日）

カナダの環境団体ファーストステップ代表のスーザンリーチさん（韓国名・李スジョン）。現在北側に豆乳製造設備を支援、7万人の子供たちに1日一杯の豆乳を飲ませている。今後は北朝鮮植樹運動を展開すると言明（昨年12月3日）

北米地域の民主平和統一諮問会議チョー副議長（70）は今後「北・米関係が冷え込めば在米同胞社会も委縮する。…北韓の森緑化・苗木運動を展開する」とインタビューに応えた。（昨年9月28日）

ヨーロッパでもほぼ同時期に、欧州地域で北韓緑化運動開始！

随想　非武装地帯を生物保護地域に

鄭 煥麒

南北を隔てる軍事境界線を中心に、南北に2キロずつ幅4キロ、東西に248キロ（この地帯の総面積、東京の1.6倍）にわたって設定されている非武装地帯には、絶滅が危ぶまれている多くの希少動植物が生きている。

小さな韓半島で、しかも近代化した産業都市のすぐ隣り合わせの地帯で、このように自然な形で動植物の存在が見られるのは、動植物のみならず、人類にとっても「自然の楽園」そのものであろう。

韓国はヨーロッパ大陸とも陸続きのため、動植物の種類では日本の比ではあるまい。従来から大自然（動植物）の観察をしようとすれば、遠い中南米やアフリカをめざしていたが、これらの地域は少なくとも近代産業や文化から取り残された地域のイメージが強い。

それを韓半島では、南北の首都から数十キロと離れていない地域に動植物の自然生息帯を見ることができるが、都市化が進むにつれ、野生の動植物は年々減っている。世界で関心が高まっている自然環境保護の精神から見ても、この希少な非武装地帯の活性化に期待すること、大である。

韓国の首都ソウルという大都会のすぐ隣りに、動植物の自然の宝庫が存在するということは、世界にも類がないであろう。

この貴重な地域を一日も早く国連教育科学文化機構（ユネスコ）の生物保護地域の指定を受けられるように、国際社会に広くアピールすることだ。また、ユネスコの指定は韓国だけのものではない。とりわけ近年、科学文明に偏っている日本は一日も早く韓半島に安全と平和が定着し、境界線内にアジア全体の平和のシンボルとなる「自然動植物園」ができ、誰でも往来できるよう、支援を惜しむべきでない。

著書「在日徒然抄」より抜粋

コラニ（赤鹿）。朝鮮半島と中国の一部で棲息。中国では絶滅危惧種に指定、DMZでは繁殖中！

私と三千里

歴史は元に戻らない　岩崎 建弥

原稿を書き始めたら、テレビが南北朝鮮の鉄道輸送削減を伝えた。あらためて国家と国民、そして、その間の距離の大きさを思っている。

2000年6月15日の金大中大統領（当時）と金正日総書記の首脳会談のテレビ中継を、感動をもって見守った。ビデオにも撮った。

それから2カ月ほどして、勤めていた新聞社に2人の男性がやってきた。現在、三千里鐵道理事長を務める都相太さんと理事の姜春根さんである。

都さんは言った。「在日として、戦争で分断された鉄道・京義線の連結を支援し、共同宣言に協力したい。南も北も、日本人も一緒に」。多くを聞かなくても、その意味するものの大きさは分かった。すぐに記事にした。

戦中に生まれ、戦後に育った新聞記者として、また一人の日本人として、長年、日本政府の「戦後責任」を追及してきた。支援している第二次大戦の空襲で死傷した日本国内の民間人に国家補償を求める運動は、37年目に入っている。

日本政府は、あの戦争で犠牲になったアジアの人への戦後責任を果たしていないのと同じく、元軍人や軍属などとして戦争に携わった者を除く自国の国民にも、まだ責任を取っていない。「死なせたり、けがをさせたりして悪かった」とわびることも、見舞金などを出すこともしていない。

また、それらのことをほとんどの日本国民は知らず、知ろうともせず、知っても、自分のこととして考えようとしない。歴史から学ばず、自身や所属する組織の目先の利害に走り、社会や世界のためという考え方ができないでいる。この民族的ともいえる「おたく体質」が、戦争に限らず、日本をめぐるさまざまな摩擦、対立の底辺にあると私はみている。

「6・15共同宣言」から8年余たったが、実りつつあった南北交流も核問題の政治駆け引きに利用され、統一への里標はまた見えにくくなっている。しかし、一歩前に進んだ歴史があと戻りすることはない。なによりも同じ民族が選んだ道なのだ。そう信じて、さらに一歩を踏み出すときだと思う。

写真館 Photograph

「鉄条網と蔓」

赤錆びた鉄条網、そこに巻きついた蔓。いつか鉄条網は朽ちはて土になり、蔓は花を咲かせ、種を宿し、命を継ぎ、生きてゆくでしょう。平和運動家、写真家・李時雨さんの傑作の一つだ。

新春インタビュー Interview

李 鳳宇さん●

「シネカノンという在日の映画会社があったと、100年後に記録されていれば、それで良い」

◉アンニョンハセヨ。まず、映画をはじめたキッカケは？

―― うーん、これと言って特には…。ただ小学生のころ母がよく映画を観に連れて行ってくれました。母が亡くなった後、遺品を整理していたら、自作の詩がありました。母は歌、踊り、チャンゴ、カヤグム等なんでもやりました。僕のアボジは一世でしたが、母は京都生まれの2世でした。工場を経営していたウェハラボジ（母方の父）の下で京都女子高に通っていたのですが、単身留学に来て工場でアルバイトをしていたアボジと出会い、後に結婚しました。アボジは解放後46年に済州島に帰国、その後母も帰国しました。ところがあの4.3事件（48年、李承晩の単独選挙に反対した島民の武装蜂起）、アボジは蜂起勃発前に逃げ、母もその後島を離れました。後に母は、幼少期の僕に当時の恐怖を語ってくれました。トイレに入ろうとしたら、銃声がなり先に入っていた人が目の前で転がり落ちて死ぬ様を見ながら、恐ろしくてトイレにも行けなかったと。それで、金目のものは全部売り払い、幼い僕の兄をつれ密航船に乗り込み、大阪鶴橋のおばさんを頼って日本に来たのです。

◉一作目の「パッチギ！」の舞台は京都でしたが、その前になるのですね？

―― はい、僕の生まれた60年以降は、京都に定住するようになりました。それまで僕の父母は、時代に翻弄されて生きてきました。アボジは留学にきた日本で徴兵から逃げ、4.3事件で故郷を逃げ、仕事だ、民族運動だと、一か所に落ち着くことはなかった。母も筋ジストロフィーを患っていた兄の治療で、良い医者がいると聞けばすぐに引っ越したのです。逃げ続けた、流転の人生でした。でも僕は、そんな父母の人生を肯定したかった、そんな父母がいるから今の僕がいるのだと。映画をやっていながらそんな思いが強い。ことに「パッチギ！」二作目には、そんな僕の思いを込めました。

◉母の影響が強かったのですね。はじめの質問ですが、映画をはじめた直接のキッカケは？

―― うーん、たまたまですよ。何かをしたいから、すぐそのことが出来るわけでもないし…。母の影響で幼少期から芸能好きでしたが、フランスに留学するまではジャーナリストを目指していました。あちらに行ってジャーナリズムを勉強してもそんなに面白くない、それで語学勉強も兼ねて映画をよく観ました。当時日本円で入場料が80円と安く、日本映画など150本ほど観てしまいました。ひょっとしたら直接のキッカケは、その時に映画の魅力に取りつかれたことでしょうか。

◉李さんを日本映画界の革命児、風雲児と評する評論家もいますが、シネカノンの今日の隆盛をいつ頃から実感するようになりましたか？

―― 隆盛などと、とんでもないです。薄氷を踏む毎日ですよ。会社を興して今年で丁度20年になりますが、大きな節目になった作品はいくつかありますが…。「月はどっちに出ている」は、当初心配しましたが、このプロデュースが成功したことで弾みがつきましたね。次に韓国映画の一連の配給です。「シュリ」、「JSA」などは日本での韓流ブームの火付け役になりました。「パッチギ！」シリーズと「フラガール」も忘れられません。「フラガール」はその年の日本映画賞を総なめにするほどの作品でしたし、「パッチギ！」は今、シリーズ完結編として第3作目を準備しています。

◉今後シネカノンの目指す頂は？

―― 特にありません。あえて言えば、お客様を裏切らない作品を、一本でも多く作り続けることでしょうか。僕は今も会社を経営しているという感覚はそんなにないし、観客に喜んでもらえる作品を、これから何本作れるだろうかに関心が行きます。そして100年後に、在日の作ったシネカノンという映画会社があったのだと記録されれば、身にあまる光栄でしょうね。

◉最後に三千里鉄道へのメッセージを一言

―― 北と南をつなぐ鉄道建設…、特に直接関係するわけではないですが、今年「クロッシング」という韓国映画を久しぶりに配給します。「シュリ」の後韓国映画は、俳優を基準にした、俳優の意向を配慮する、一部観客に迎合する傾向を脱しきれず、二流に低迷していると僕は見ていたので、配給を止めていました。ところがこの「クロッシング」に接したときに、「シュリ」を初めて見たときの衝撃を受けました。脱北者を扱いながら、北朝鮮の体制批判を避け、ひたすら生きるための親子の愛を描いている珠玉の作品でした。僕はこの映画を通して観客が、北も南も同じ民族、血を分けた兄弟であることを確認しあえると確信しています。親子の愛、兄弟の愛が、やがては南北をつなぎ、北域緑化へと広がるものと信じたいのです。

人・サラム Salam

人柄が偲ばれるスケッチ展

西條 紀子さん ● 名古屋

（写真 右が本人）

昨年、東京千代田区神田神保町すずらん通りの檜画廊において、一昨年ご逝去された西條八束先生の想い出をたどる二人展があった。淡い色で仕上げた自然や静物のスケッチが、画廊を訪れる人々を迎えてくれた。

在りし日の夫君の遺影がほほ笑む右側の壁には、西條八束先生の作品が、左側には紀子さんの作品が飾られていた。

僕は自己紹介の後、絵を鑑賞しながらカメラにも収め、さりげなく客をもてなす画家を観察した。遺影からほほ笑む八束先生の表情と、穏やかに接客される紀子さんの表情のなんと似ていることか。画家のお人柄が偲ばれた。

1932年東京に生まれ、小学校の時に在日の旧友と一緒に過ごしたことがある。当時は牛乳配達、廃品回収業などで生計を立て、じっと我慢しながら黙々と生きている在日コリアンの姿をみて育った。戦後1954年頃から、近くに住んでおられた画家の呉炳学先生との交流がはじまり、特にここ30年ほどは厳しい絵の手ほどきを受けた。

1959年、夫が名古屋大学に転勤した。名古屋に来てからも八束先生は、陸水学の観点から環境保護を訴え、日本の河川行政にも一石を投じるなどの活動をする傍ら、三千里鉄道の趣旨にも賛同し当初から会員として在籍していた。夫は仕事の関係で韓国の学者とも付き合っていたのだが、80歳を超えて突然韓国語を習い始めた。結局は「안녕하십니까」くらいしか憶えられないとこぼしていたという。

夫は生前世界の湖を訪れ、観察、研究の合間にスケッチを残している。二人展には白頭山のスケッチもあった。もし先生がいらっしゃれば、北域緑化支援に多くのご助言をいただけたのに、本当に残念だ。

編集部に寄せていただいたお手紙に、「三千里鉄道の運動が実って南北が繋がり、非武装地帯に手つかずの自然（動植物、鳥類、河川など）が生かされる日が一日も早く来ることを、今は天に登ってしまった夫とともに願っております」との、メッセージがあった。

近々、名古屋でも二人展を開催されるそうだ。その日は皆で行こう。乞う、ご期待!

在日同胞オリニ用の
ウリマル教材セットが発売される

日本各地の朝鮮学校の閉鎖・統合が伝えられる。朝鮮学校は解放後の在日同胞社会にあって民族教育の要として機能し、現代日本の各分野で活躍する同胞を多く輩出してきたのは周知の事実である。

一方、今年4月には大阪茨木の地に『コリア国際学園』が産声を上げたことに示されるように、在日同胞社会において民族教育に対する期待は決して衰えているわけではない。

在日同胞の子どもたちが民族的素養も兼ね備えることが、その子の健全な発達を保障し、また将来において有利に働くこともよく知られている。

そのような中で、韓国語教材専門書店である『ハングルの森』（http://www.eac-hg.jp）が、在日同胞のオリニを対象にしたウリマル教材を製作発売した。

この教材セットは、《i-PEN》という『ペン型の音声再生装置』を使用したもので、文字やイラストにそのペンをのせると、音声が再生される仕組みになっていて、聞きたいところを何度でも繰り返し聞くことができるのが特徴。

教材セットは、ハングル教材1冊、韓国語会話教材2冊、韓国の昔話絵本が5冊とそのガイドブックからなっており、英語と日本語の解説と翻訳があり、韓国語と英語は《i-PEN》で発音を繰り返し何度でも聞くことができる。

小学校高学年を主な対象年齢としており、子どもたちが親しみを持って学ぶことができるように、会話教材の主人公は同年代の子ども、場面設定は家庭と学校生活で構成。

同胞家庭で親と子どもが一緒に楽しく韓国語を学ぶのにふさわしいものだ。

実際に、都相太三千里鉄道理事長のご子息の家庭では、これまでウリマルを勉強する機会がなかったミョヌリが「これなら私も子どもといっしょに勉強できる。」と喜んでいるという。

価格は25,000円。少々高いが、孫へのプレゼントに最適といえそうだ。

また、『ハングルの森』では、この教材セットを販売する代理店を募集している。

連絡先▶052-433-4757

Information

◉ブログ開設

三千里鐵道のブログ、昨年8月22日に開設。
IDは sanzenri2010　一度ご覧になって下さい。

劇評 「向日葵の棺」— 新宿梁山泊公演を鑑賞

昨年11月30日、岐阜県可児市での公演を観た。芥川賞作家・柳美里の戯曲を、新宿梁山泊の金守珍が演出した舞台だ。

家族の数だけ「物語」があるーチラシのキャッチコピー。在日の家庭をテーマにした柳美里の自叙伝的作品だ（劇評参照）。この日、三千里の仲間7名が招待された。都相太理事長の奥さんがキムチ、蒸した蜂の巣等手づくしの料理をバックに詰め、楽屋に届けた。

今年9月、豊橋市で公演があるそうだ。今から楽しみだ。

（左から三人目が金守珍）

「向日葵の棺」を観る　磯貝 治良

昨年の11月30日に三千里鐵道の何人かと柳美里作・金守珍演出の「向日葵の棺」を可児市文化創造センターで観た。

1970年前後にはアングラ劇団と付き合って、公演の手伝いもした。テント劇団が私の小説を芝居にしてくれたこともあった。80年前後にはマダンノリペ緑豆というマダン劇まがいのグループを作って、自主公演や集会などで出前公演をした。2007年に光州から表現集団シンミョンが来日したとき、「トッケビと両班」を10数年ぶりに前座で演じた。芝居との付き合いはその程度だが、根が芝居好きなので久々の演劇を満喫した。

「向日葵の棺」には柳美里が主題にしつづける“家族の物語”の原質がある。“家族の物語”といっても、絆の結びがたさ、つまり家族の物語の不可能性だ。母の家出=不在を背景に父、息子、娘の心理が彷徨し、臨界点に達して家族は解体する。家族の不可能性は他者との関係の不可能性と連結している。ふたつの“人殺し”は、現実の殺人の模写によってカタストロフが演出されたのではなく、演劇的喩=メタファーだろう。一種の不条理劇。

金守珍の演出は、歌や身体表現を挿入して芸術の大衆化を試みる。今回も柳美里ふう息苦しさを適度に削いで舞台を鮮明化した。蛇足を言えば、シリアスなものであればあるほど良質な笑いを生むはずだが、舞台にはそれが若干、不足していたのでは。

それにしても、最後の向日葵の映像的イメージは見事だった。演劇的喩の見事な表象=視覚化だった。

編集後記

また前途に霧がかかった。先が見えない。10.4の南北首脳会談実現、すぐにでも南北鉄道が繋がりそうな雰囲気であった。しかし、試運転まではそれから7年を要した。

今、境界線を重く覆っている閉塞感は、いつか和らぐであろう。そして、霧が晴れ鉄馬が再びいななく日の来ることを信じたい。諦めることなく思い続けること、小さな行動を積み重ねて行くこと、その先に可能性は開くことを信じたい。（南）

三千里鐵道主催

第2回 スタディツアー

【開城工団―南北協商と平和統一の礎石】

参加者募集のお知らせ

NPO法人三千里鐵道は、2002年3月に、『JSAツアー』を開催しました。

この時は、韓国政府統一部に京義線鐵道連結資金としての募金を伝達することを兼ねて、板門店を始めとして朝鮮戦争最大の激戦地の一つであった鐵原、都羅山統一展望台など戦争の傷跡や分断の現状を見学し、また6.15共同宣言の意味や南北の平和統一に関する講演を聴くなど、素晴らしいツアーとなりました。

今回その第2弾を企画しました。分断の痛みを分かち合い、平和と統一の歩みに同参する研修ツアーです。ぜひご参加ください。

【開催要項】

ツアー名▶『開城工団ー南北協商と平和統一の礎石』

ツアー主催▶特別非営利活動法人　三千里鐵道

ツアー後援▶韓国民族和解協力汎国民協議会、統一マジ、在日コリア協議会

募集定員▶35名（先着順、国籍不問）

ツアー料金▶7万円（往復航空券は参加者各自で手配のこと）

申込み先▶NPO法人　三千里鐵道　TEL0532-53-6999　FAX0532-54-4931

※別紙申込み用紙に記入の上2月28日㊏までにFAXしてください。

日　　程▶2009年**4月23日㊍～27日㊊**

23日㊍	午後2時　ソウル世宗ホテル集合　受付 午後4時　講演1『開城公団と南北協商の現住所』 午後6時　歓迎晩さん会（韓国民和協主催）	 講師●李鳳朝氏 宿泊●世宗ホテル
24日㊎	開城工団見学および開城観光（終日）	宿泊●世宗ホテル
25日㊏	漢江河口（休戦線ツアー） 午後4時　講演2『北域緑化の現状と課題』	案内●李時雨氏 講師●丁世鉉氏　宿泊●江華島
26日㊐	歴史探訪ツアー（江華島） 午後6時　答礼晩さん会（主催三千里鐵道）	案内●李時雨氏 宿泊●世宗ホテル

講師および案内者紹介

丁世鉉氏●元統一部長官　民和協常任共同議長　『同胞の森』共同代表

李鳳朝氏●前統一研究院　院長

李時雨氏●写真作家　統一マジ　※現在国家保安法違反で係争中

※なおご承知のように開城観光は中断していますし、開城工団事業も存亡の危機にあります。しかし、今年の春には必ず好転するものと確信してこの企画をしました。

※万が一の場合には、日程の変更またはツアーそのものを中止する場合があります。